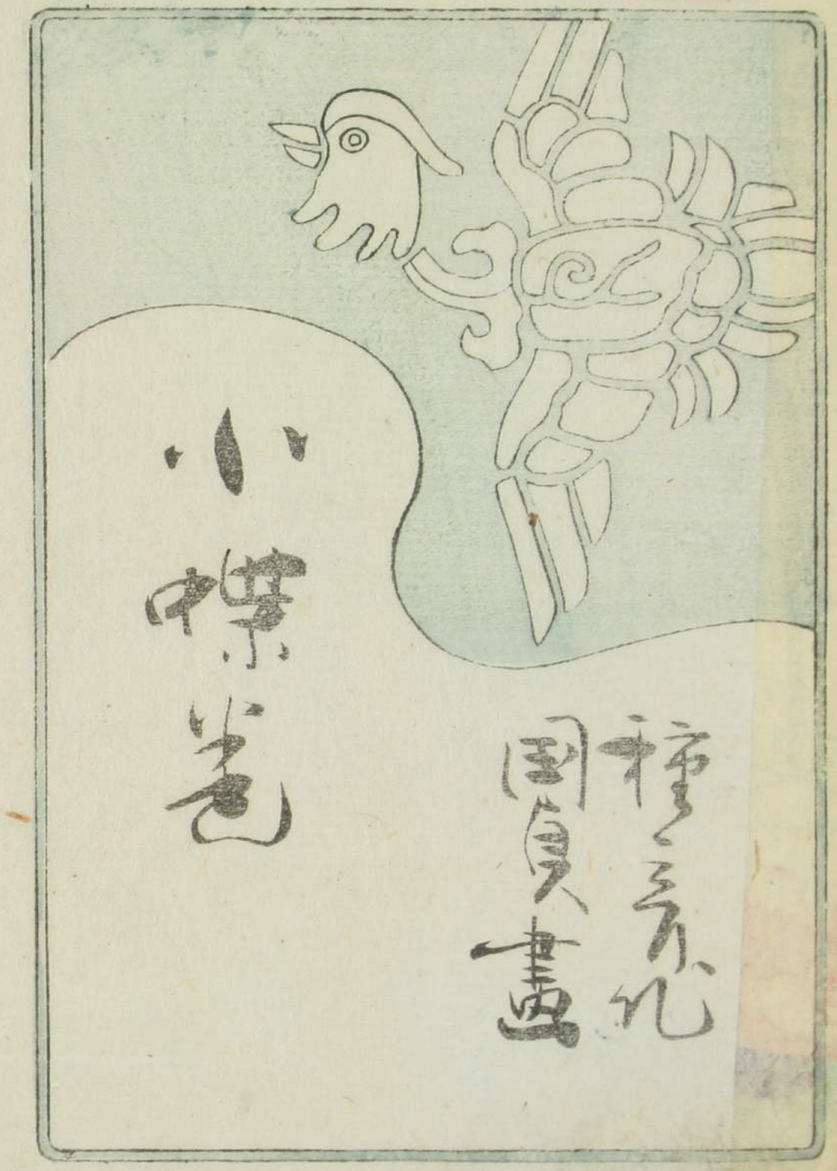
宝
源氏
胡蝶
巻
廿一
13
3718
11

門べ13
號3718
卷11



八百善で賣る魚類とて。異しく濱より揚るよりのねど。風味別ある如くよ思ふに全く暖簾の徳あるんといふ人あるるの左丹ぬるまで。調理の精巧余所他よ倍せし所のあるべきを止まん。

合巻々近年い紅英堂の梓よあるねば。肴官が愛ぬらば。是暖簾の徳といふべし。刻成迫の主人が丹情余所の書肆と大い異なり故よ此史の如く。拙きの中の拙作よ魚を申さば二日賣されど仕立の割意よ他家の及ぬ所あれば。配りの雑が賣切を断る程の事とる聞陋よ此編前編の豆ねを補ひ。山谷の事を專ら記せしるる。山谷とりふ字よ八百善を思ひ寄る。此席とるるる

柳亭一白翁

義忠太

乙骨太郎
細次郎
廣沼信濃

偽花園の秋津

世話のつゞき
信

信
犬

是より下も五丁の画もの
あいぬぐものがくろふそ
ろかる

孫
曽

犬

本家
實母散
さすがぜんきんどもやんちのこころ一切の病氣
中橋南傳馬町一丁目東ゝ
千葉堂孝輔製

柳蔭月朝妻

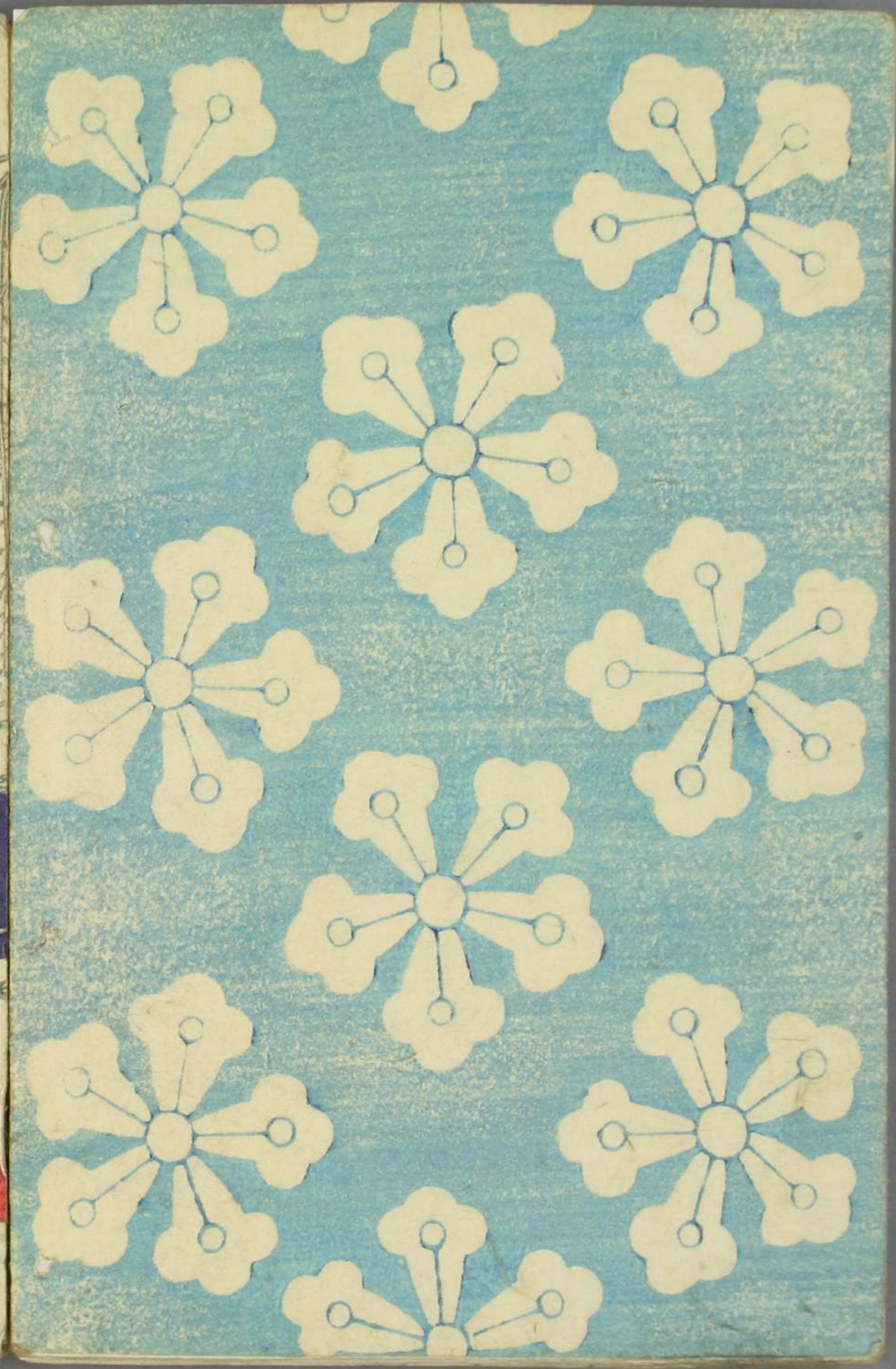
四編ヨリ山々亭有人作
九編迄 梅朝樓國貞画

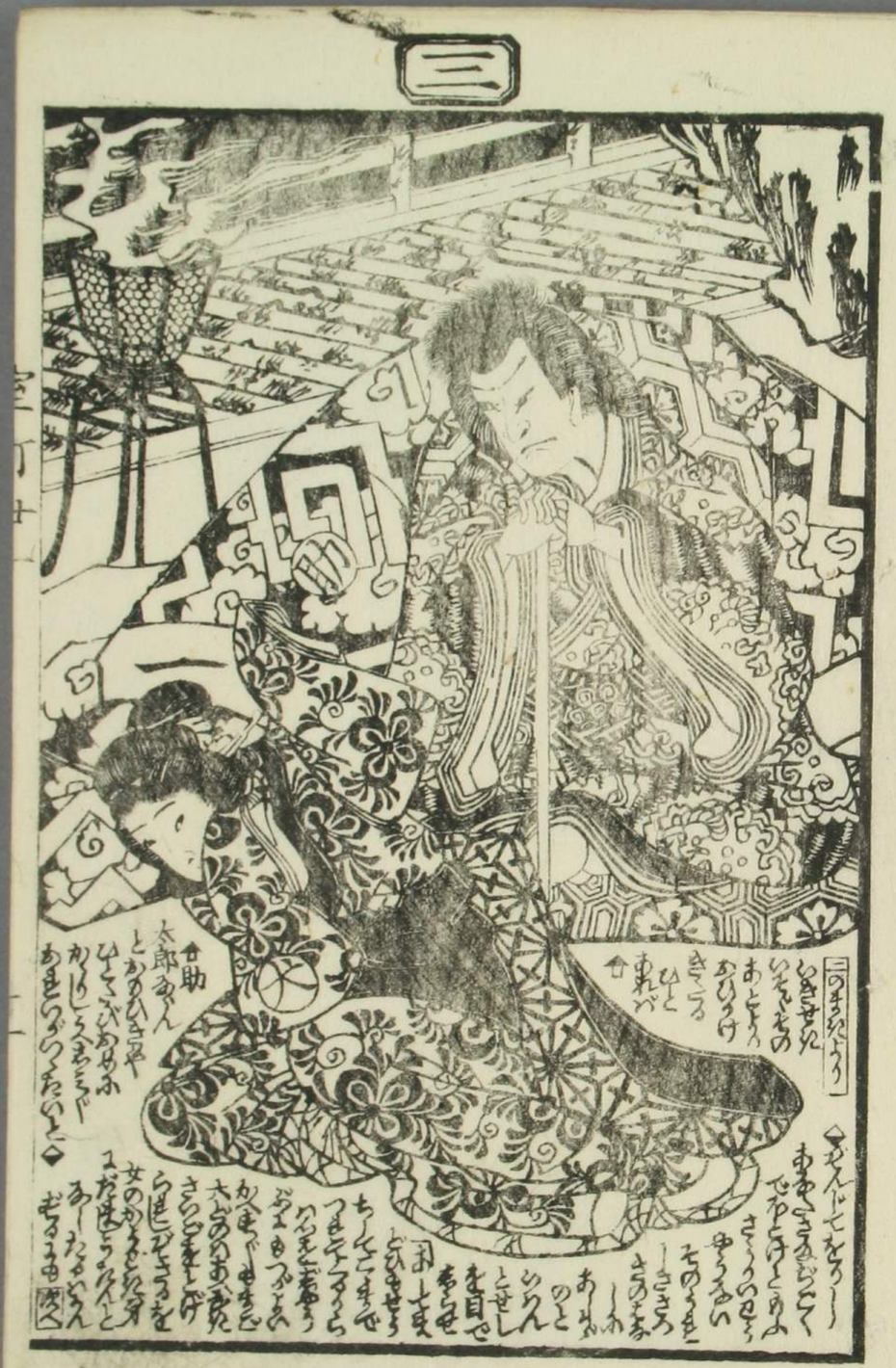
藪黄鶯八幡不知

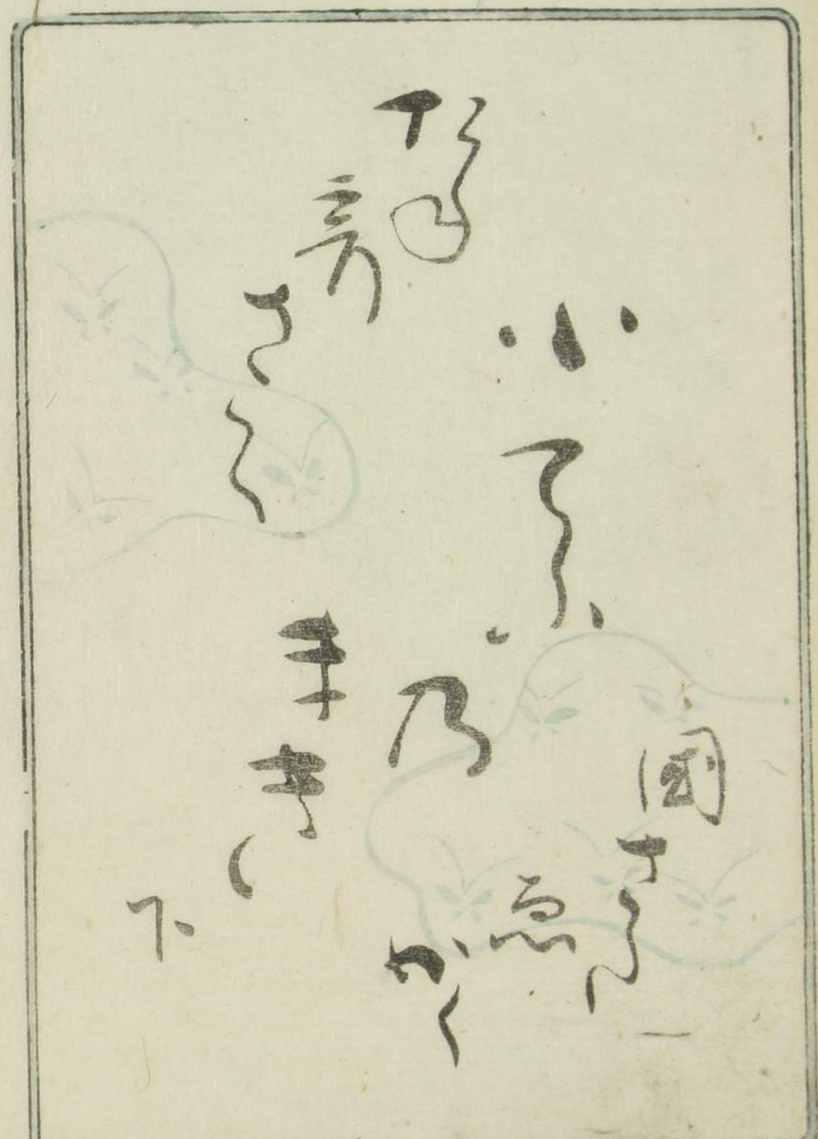
山々亭有人作
錦朝樓芳国画

當春賣出し所の柳蔭月の朝妻殊の外御機嫌る恊ひ製本手廻ら宜る迄ゝ
賣捌に段外聞旁御自性合奉待れ大分御徳く當年彼時藪澤門諸國を經歴在ら事を
鎌倉の深く事ね〳〵幡の新の奥を探しなる可夫藪鶯〳〵作者画工が東ゝ言む彫摺等迄
念ご入初編ゝ迄無相違迄出板世ち是非御覧かけ同様ひて為る藪鶯を賞玉ひ

国
種彦作
竹一筆




三
二のまるだうう
助太郎あんとあるひさやひとさびあるかしらあるとこどあまりつかたいと



室町廿一
十五

室町廿一
信

信
龍

此西人四名あり名を
記まゝ編を要さず
自然解あらん

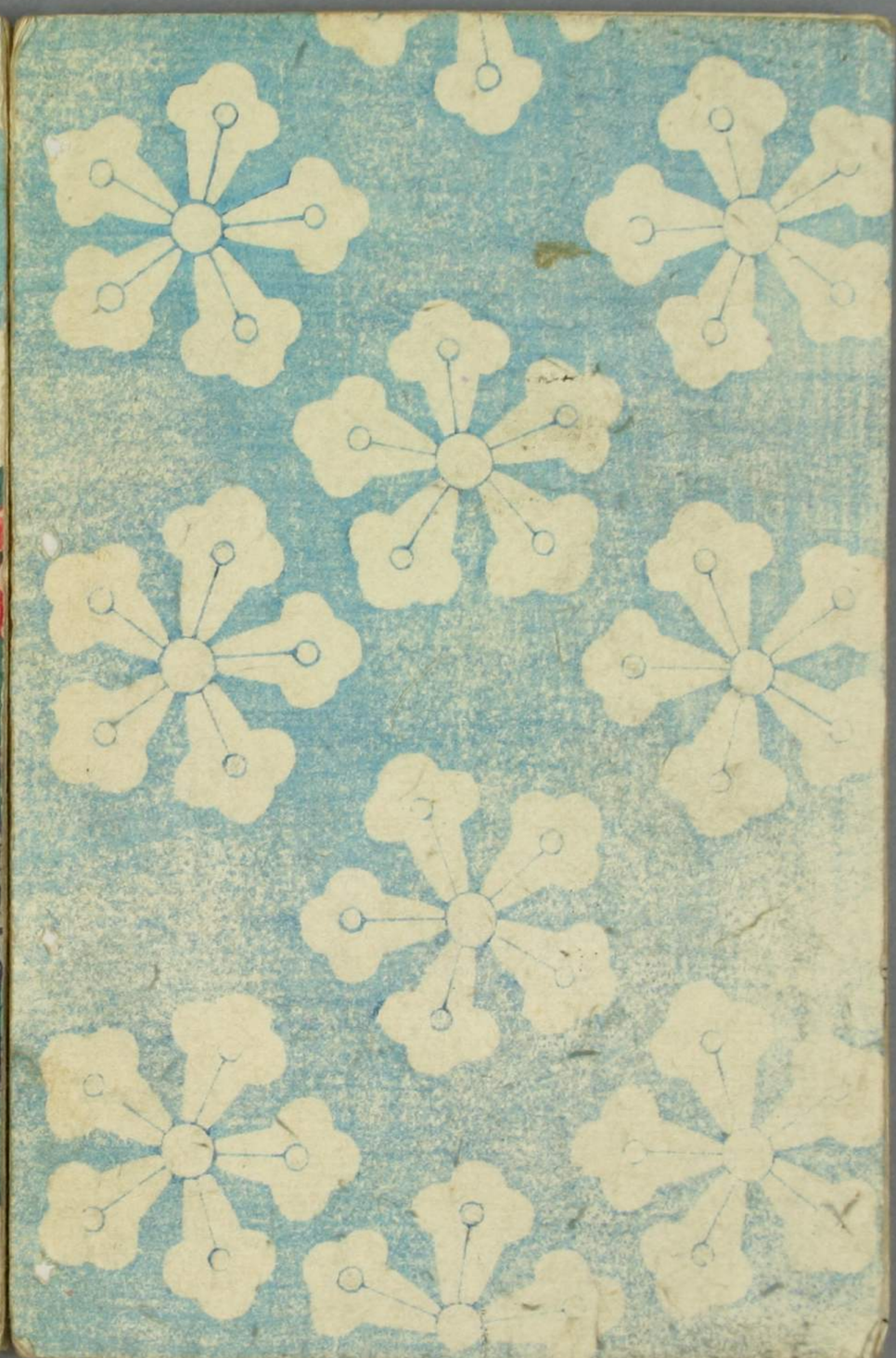
五郎

明治四年辛未陽春開板標目

厚化粧萬年嶋田 八編 春水作 國貞画
室町源氏胡蝶卷 十九編 二十編 二十一編 種彦作 國貞画
鼠祠通夜譚 八編 九編 種彦作 國貞画
童謡妙々車 廿四編 廿五編 種彦作 國貞画
薄倭幼日記 二十編 二十一編 春水作 國貞画
七編半葛飾譚 十一編 十二編 種彦作 國貞画
新局九尾傳 十二編 十三編 十四編 春水作 國貞画
筆海四國聞書 十三編 十四編 種彦作 國貞画
明鴉墨画稲福 十六編 十七編 種彦作 國貞画
花封蒼玉章 十編 大尾 種彦作 國貞画
八犬傳犬の双紙 五十四編 五十五編 柳亭作 國政画

南傳馬町壹丁目 蔦屋吉藏板

二十三角



或時故小團治丈（傍ら）幕府の狂言の祝玉に
出るといふと看官は小團治丈が元井より出るものゝ
ごとく思ふべし已に師翁が妙案に出田舎源氏に光氏と
呼ぶ名は三歳兒も知る程なれば柳亭種彦と改名を
したゝめ初て第一の巻と題し唯一の關の扉に佐倉者を
九太夫の樣の下に移るちうの人世妻らいづまるあれ
ど俗老紀つまるぬるものはまなれまでと述懐と獨り
嘆じて水無月に筆を行ふ

柳亭種彦

足利義滿

北小路通氏
廣沼信濃

般若

半

半
蝶

深

菊
唐
呉

二
氷

早

冰

菊

水

冰

主

這八冰三が物語

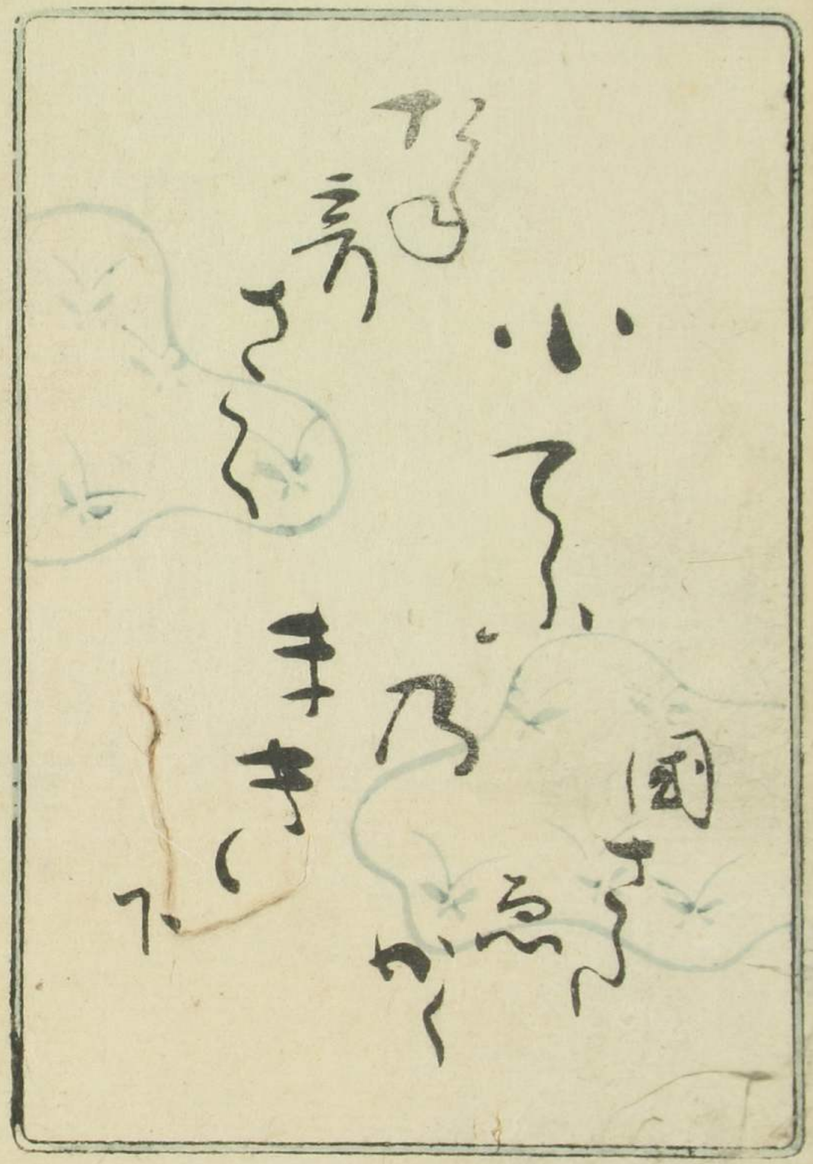
實母散
本家
中橋南鍋町一丁目東側
藥堂孝輔製

柳蔭月朝妻 四編より 山々亭有人作
九編迄 梅朝樓國貞画

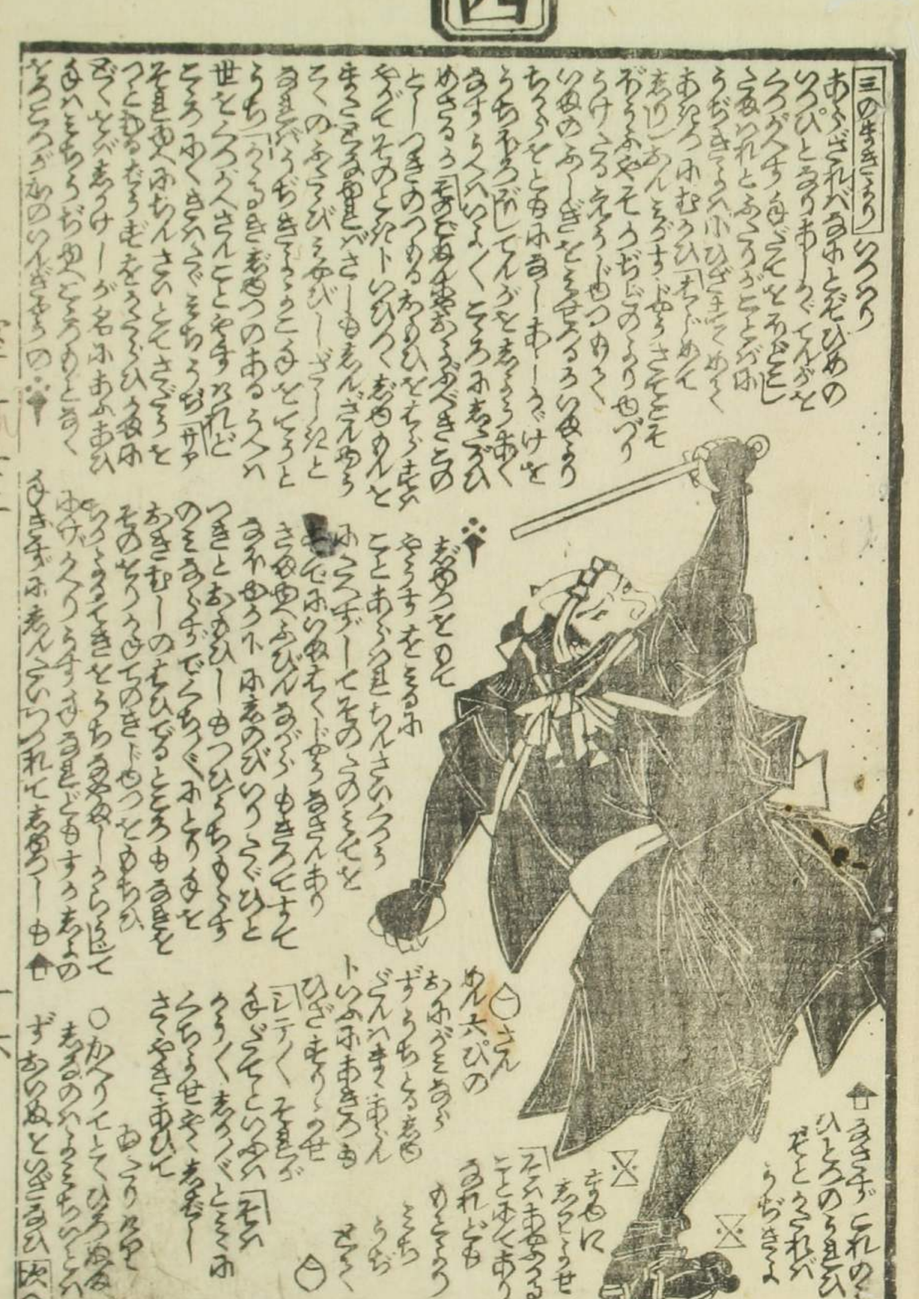
藪黄鸝八幡不知 山々亭有人作
錦朝樓芳虎画

當春賣出し吟の柳蔭月の朝妻樂の外御機嫌る恢ひ製本手廻らぎる近ま
賣捌に段々聞旁〻自仕合幸存ト大ク御機嫌當年彼時横濱諸國を經歴在る事
雖ども深く東ハ八幡の藪の鶯と樂しみ

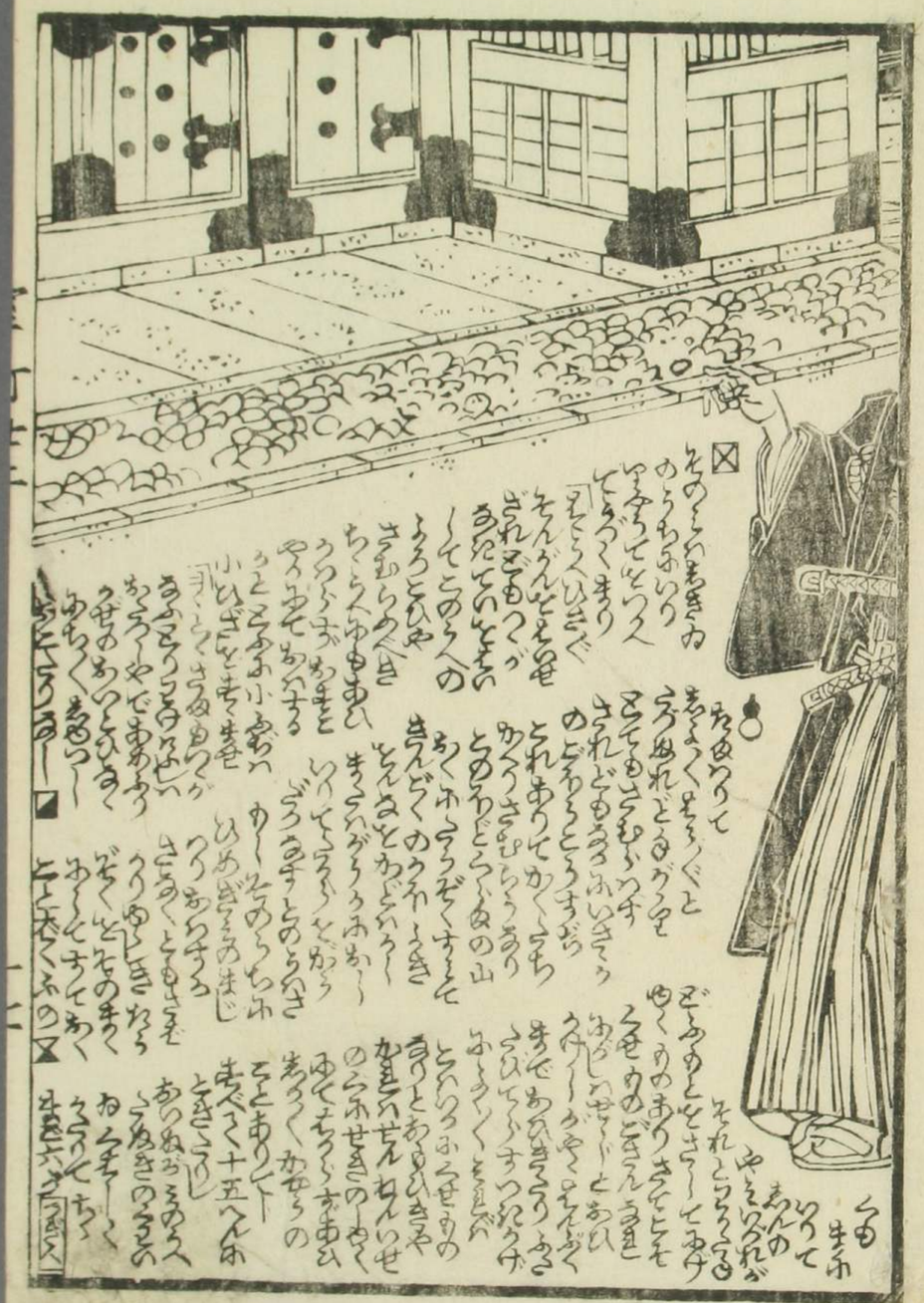
豐國画
三十二編


小てくふ
乃かく
きくまきし
て

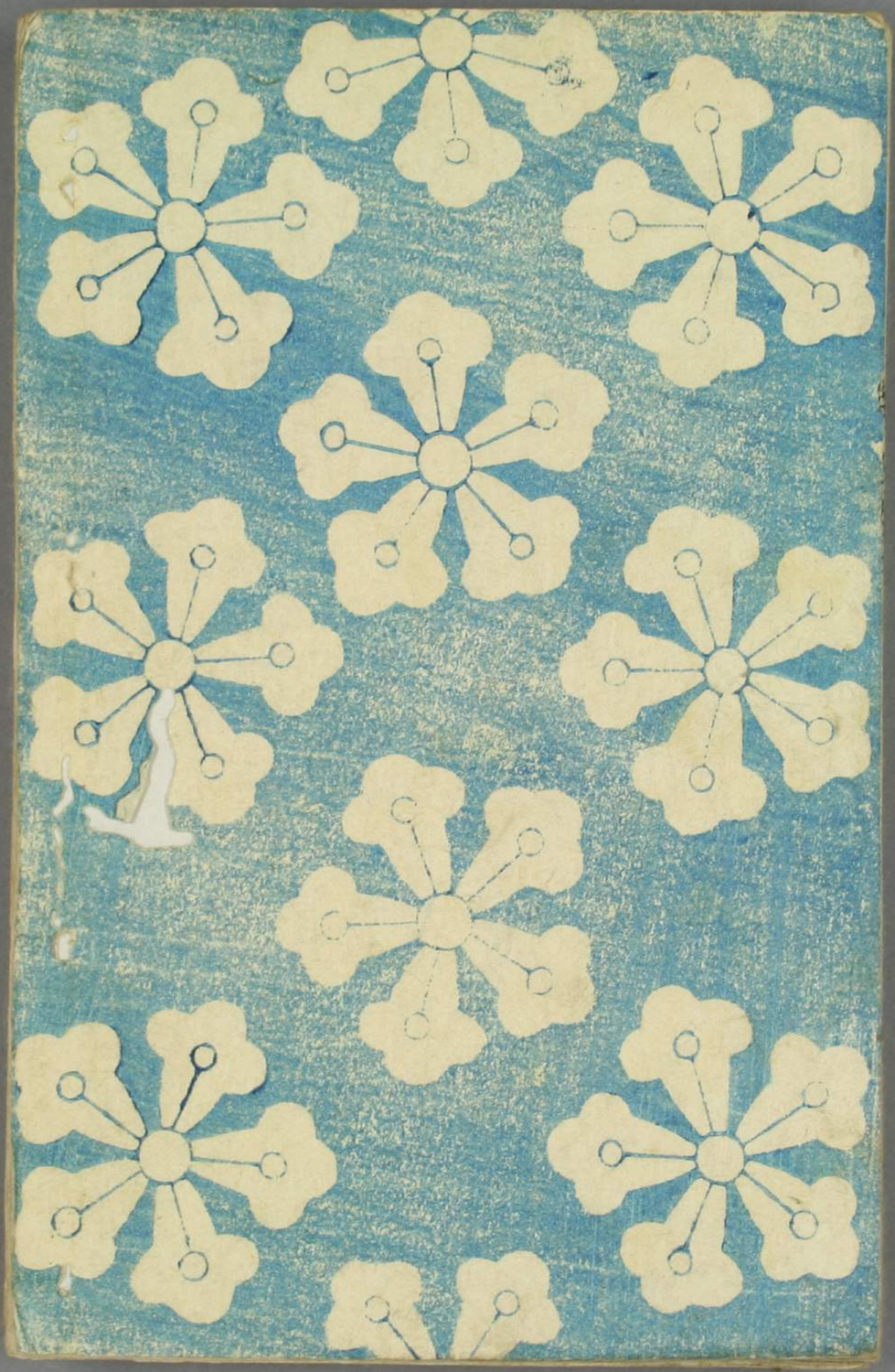
三
上の巻より
冰
主
ぎのき
たくと
ニッにハ
つまり
どの
きの
を



信
天



明治四年辛未陽春開板標目

厚化粧葛飾嶋田 八編 春水作 国貞画
室町源氏胡蝶巻 十九編 二十編 二十一編 種彦作 国貞画
鼠祠通夜譚 八編 九編 種彦作 国貞画
童謡妙々車 廿四編 廿五編 種彦作 国貞画
薄倖幼日記 二十編 二十一編 春水作 国貞画
十編まで葛飾譚 十一編 十二編 種彦作 国貞画
南総里見八犬伝 十二編 十三編 十四編 春水作 国貞画
局九尾傳 十二編 十三編 十四編 春水作 国貞画
筆海四國聞書 十三編 十四編 種彦作 国貞画
明鴉黒塗画廻燈籠 十六編 十七編 種彦作 国貞画
花封蓉玉章 十編 大尾 種彦作 国貞画
八犬傳犬の双紙 五十四編 五十五編 柳亭作 国政画

南傳馬町壹丁目
鶴屋吉藏板